

市史講座第 11 回ミニレポート

2 月 9 日(土)第 11 回の講座が開かれました。

第 1 部 : 「松江の弥生時代」(講師:前島根県教育庁文化財課長 松本 岩雄 先生)



松本先生は、昨年 3 月に発刊された『松江市史 史料編 2 考古資料』をもとに、松江の弥生時代の概要や特徴をお話しされました。

特に、出雲の弥生時代といえば、大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡がクローズアップされているが、その発見の前に松江市鹿島町の志谷奥遺跡で銅剣と銅鐸が共に出土したことから、当時の社会の教科書にも載っている日本の歴史を塗り替えたと説明されました。

また、松江を含めた出雲地域には朝鮮半島、九州、吉備などから持ち込まれたと考えられる土器などの遺物が数多くみられることから、弥生時代の出雲の地は日本海(東西)や中国山地(南北)を介した交流の結

節点であるとされました。そして、現在は出雲というと閉鎖的だといわれるが、遺跡の状況からみると弥生時代は開放的で生き生きとしているイメージがわいてくるとお話しされました。

最後に、弥生時代は意識的に世界との交流をはじめた時代であり、出雲はその重要な役割を担っていたとまとめられました。

第2部：「松江藩の儒学者たち-宇佐美しん水と桃白鹿-」(講師:大阪大学大学院准教授 宇野田尚哉 先生)



幕府は当初から社会的、経済的には仏教に重きを置き、学問の基礎は儒学としてきましたが、18世紀後半の藩政改革期以降は藩儒を登用し、藩校を設けるという動向が顕著になります。宇野田先生は松江藩の事例として、その頃藩が儒者として迎えた二人の儒学者に焦点をあて、儒者の藩内での位置と身分上の特質や役割をお話しされました。

藩儒の役割は藩主の侍講、世子庶子の教育、藩士及びその子弟の教育、系譜や年譜の編纂等があり、松江藩の特徴として宇佐美しん水は江戸詰めで、桃白鹿は国元で藩の教育活動に努めるという役割分担がありました。今後松江市史近世編において残存する宇佐美の書翰、桃家歴代の日記類、その他著作・編纂物等に

より、藩の教育、学習活動と藩政改革の関係等を解明していきたいと話されました。